

未来への記憶 — 『カラガンダ州における日本人捕虜』 刊行に寄せて —

Memories for a Future:

Preface to the Publication of *Japanese Prisoners of War in Karaganda Oblast*

ヌルラン・ドゥラトベーコフ
Nurlan Dulatbekov

主権・独立国家カザフスタンの発展の現段階において、大学教育の質的発展の課題がきわだっている。カザフスタン社会の増大する高度な専門家に対する需要を充足し、科学技術の諸分野における学術研究センターとなるような大学教育である。

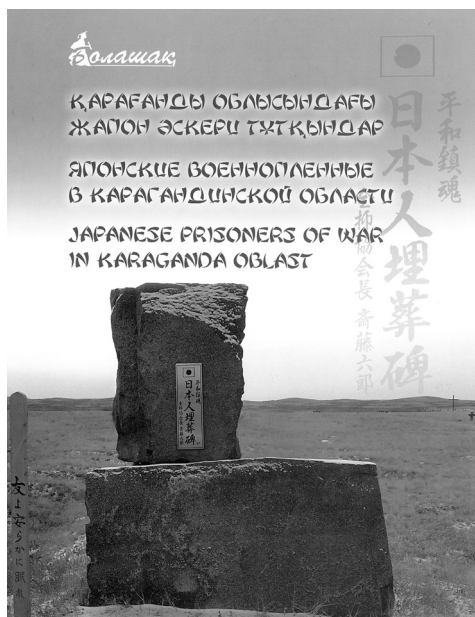
カザフスタン共和国大統領 N. A. ナザルバーエフの教書「ともに未来を建設する」に含まれたこの戦略的課題は、現代的方法及びテクノロジーに基づく教育過程が大学学術の発展と調和的に結合するような教育センターへと大学が変ることを求めている。

まさに、カラガンダの〈ボラシャーク〉大学は自らをかける教育・学術センターと位置づけている。ここでは長年にわたって、経済、法律、国際法等の高度な専門家を養成する整備されたメカニズムが機能している。

〈ボラシャーク〉大学における教育過程の重要部分をなすのが、基礎及び先端専門分野の諸学科で行われている学術研究活動である。諸学科の教授スタッフは数十の学術書、数百の論文、そして海外の研究教育機関との緊密な連絡をもち、共和国レベル及び国際的な学術会議に積極的に参加している。

〈ボラシャーク〉大学では、こうした学術研究活動のほか、中央カザフスタン学術研究所が活発に機能している。地域的及びグローバルな性格の歴史＝法律問題の広域をカバーした大規模な学術研究プロジェクトを成功裏に推進している。

20世紀大規模政治弾圧史を研究する学術研究・歴史教育センターの顕著な成果の一つが、15巻本『カルラーグ史』の最初の5巻の刊行である。4巻には四人の作品が収められ、1巻は1954年のケンギル蜂起の歴史を扱っている（カザフ語、ロシア語、英語）。この出版物のプレゼンテーションは、2010年5月にアスタナ市で開かれた学術会議「歴史から現代へ」において成功裏になされた。学術研究・歴史教育センターはさらに二つのプロジェクトを実現し、2011年4-5月



に『カラガンダ州における日本人捕虜』と『ソ連内務省ステップ・ラーゲリ略史』を刊行した。2012年2月には、『カルラグ史』プロジェクトの一環としてアルバム『カルラグ』を刊行した。カラガンダ矯正労働収容所の歴史に関わるユニークで、大部分は公表されたことのない写真と公文書を掲載したものである。

ソ連では20世紀1930年代初めから収容所システムが設立され、拡張した。大規模ラーゲリは、組織された拘禁施設の主要構成要素をなしている。1930年代から50年代にかけてカラガンダ州にはカラガンダ矯正労働収容所（Karlag）が設置され、活動していたが、それは弾圧機関に転じたのみならず、収容所生産複合体の強力な要素となり、カザフスタンだけではなくソ連全体の生産力の重要部分をなしたのである。

カルラグには長年、数万人の政治犯やその他の刑事犯が非人間的な条件下で収容されており、農業、建設、工業生産に無慈悲に利用されていた。完全な無権利状態、病気と半飢餓状態、衣服履物の不足、厳しい肉体労働、寒さと暑さのため囚人が大量に死亡し、13000人を超える年もあった。収容所が存在した全期間を通じて、囚人の数や分所の構成は不断に変化した。囚人労働の結果、中央カザフスタンの広大なステップ地帯が経済的に利用され、工業生産は増大し、カラガンダ州のインフラストラクチャーの土台が築かれた。

カルラグの歴史は、祖国史の学術研究の重要テーマの一つである。このテーマの専門的な研究がきわめて不十分であるため、カラガンダ州史の1930 - 50年代の学術的認識の形成過程が著しく遅れている。

第2次世界大戦は、世界史上最も恐ろしい、残酷な出来事だった。それは数千万の人名を奪い、ヨーロッパと世界の地図を塗り替え、国際関係システムを根本的に変更し、人間の運命を歪め、大地に大きな傷跡を残した。戦後長年にわたって、このテーマに関する数千もの書物が出された。大戦の原因、経過、力関係が実に詳細に検討された。犠牲者の正確な数字については、今日まで論争が絶えない。ここで忘れてはならないのは、民族、信仰、国籍にかかわらず捕虜収容所で生活／人生を破滅させられた人々のことである。前線で戦い合ったのは、自分の帝国主義的野心を満たすことが目的の指導者たちの闘争に巻き込まれた普通の人々だという点を一瞬でも想起する価値はある。

今日重要なのは歴史的公正の復活であるが、第2次世界大戦のテーマ、その根本原因、責任者、結果がどこまで真に正しく明らかにされるかに非常に多くのことがかかっている。むき出しの暴力では真の尊敬も成功も得られず、全世界の学者が細部やニュアンスを客観的に検討し、自分の考えのいずれかでも大衆に伝えようとしていることを、青年たちは理解すべきだ。このような悲劇が今後二度と繰り返されないよう、全力を挙げねばならない。

今日重要なのは死亡し、行方不明となった捕虜のリストを復活し、もって戦争被害者の正確な人数を確定することである。この問題を解決する上で劣らず重要なのは、最愛の人・縁者の運命を少しでも知りたいという肉親の公正な要望である。それゆえ、この種の資料を探すことも現在の研究者にとっての最重要の課題の一つである。

皆さんに提示する本は、わが大学の学術研究・歴史教育センターのもう一つのプロジェクトの実現結果、『中央カザフスタンにおける捕虜の歴史』である。

祖国の英雄的な歴史のドラマの中でも、重要な位置を占めるのが戦後期（1945 - 1950年）である。この時期、カラガンダ人もカザフスタン人全体も、戦後の制約や困難を伴う共和国の経済的・社会的・文化的発展にまことに積極的に参加した。この時期は、カラガンダ州が矯正労働収容所網（カルラグ）に覆われ、そこにはソ連市民のほか、ドイツ軍及び日本軍兵士を含む外国人捕虜も収容されていたのである。

スターリンに代表されるソ連政治指導部の意志によりカラガンダ州を含むカザフスタンにいる日本人捕虜は、その後は既存の収容所（第99）と新設の収容所（第37、39）の収容増で補充されながら、工業及び民生建設に引き入れられ、石炭・銅鉱の採掘、銅製錬に従事させられた。日本人捕虜の給養条件は、他の捕虜と同じく極度に厳しかったが、当時の体制及び社会の基準と完全に合致していた。

カザフスタンにおける日本人捕虜在留史は、祖国の歴史学の中で最も研究されていないテーマの一つである。このテーマの個別研究がないために、カラガンダ地域の戦後史の科学的理解の形成は著しく困難だった。

こうした状況下で本書の著者たちは、現存する歴史の空白を埋めることを自分の義務と考えた。カラガンダ地域の日本人捕虜在留史の検討の過程では、複合的な施策が徹底的にとられた。何よりもまず、このテーマでわが国や外国の歴史家が書いた著作を仔細に研究した。一連の公文書館で、然るべき文書・資料の大群を探索、発見、研究する綿密な仕事が行われた。文献と公文書の分析の結果として研究課題が練り上げられたが、それは問題の複雑さ及び多面性、従来の検討の不十分さ、問題のアクチュアルで新鮮なことによって規定されていた。こうしたファクターに規定されて、著者たちの関心は日本人捕虜給養の性格と条件、食事・衣服の保障、医療サービスの実施、労働利用のような主要な側面に集中することになった。

主権国家カザフスタンの未来志向のダイナミックな発展は、カザフスタン人、とくに青年の歴史意識の水準に大きく依存している。これとの関係で特別な役割を果たすのは、祖国の歴史、何よりもまず、戦後初期のような時期の複雑で充実したダイナミズムの深い学術的研究である。

この時期は、1935 - 1945年の第2次世界大戦がもたらした巨大な困難にもかかわらず、カラガンダ州を含むカザフスタンの産業の開発・発展のテンポは落ちなかった。この課題の解決に重要な役割を果たしたのは何よりも、祖国に対する責任と義務を感じ、人類史上最も破壊的だった戦争を勝利のうちに終え、国民経済の復興・発展に向けた創造の労働に積極的かつ自己犠牲的に取り組んだカザフスタン人である。

カザフスタンの産業の開発・発展の課題に彼らとともに当たったのは、多数のGULAG（グラード/矯正労働収容所管理総局）の囚人と、外国人捕虜及び抑留者である。

第2次世界大戦中並びに終結後にカザフスタンにはヨーロッパ及び東方諸民族の捕虜・抑留者が数多く移送された。ドイツ人、オーストリア人、ポーランド人、ルーマニア人、日本人、中国人、朝鮮人などである。彼らはすべて、ソ連内務省GUPVI（捕虜・抑留者業務管理総局）に下屬する捕虜収容所に集められた。

カザフスタンに配置された15の捕虜収容所のうち、4はカラガンダ州にあった。これらに収容され、戦後初期はとくに広範に展開された工業及び民生建設、石炭・銅鉱の採掘、銅製錬などで積極的に用いられた捕虜は、カラガンダ州とカザフスタン全体の経済発展に顕著な貢献をした。カラガンダ地域の捕虜総数は31074人であった。うち日本人は15735人、つまり50.6%であった。州国民経済の主要部門の建設・稼働でも相応の貢献をした。これは、日本人捕虜が戦後初期のカラガンダ州に経済発展に、従ってまた同地域のみならず、共和国全体の社会的福祉の物質的基盤の強化に果たした役割を明瞭に物語っている。

このような歴史に照らすと、カラガンダ州の収容所における日本人捕虜在留の歴史は特別なアクチュアリティと重要な意義を持つ。このテーマの研究は、科学的な祖国史戦後期像を著しく深化・拡大し、住民諸層、とくに青年の歴史意識形成の事業に大きく貢献することを可能にする。しかも、この問題の政治的側面にも少なからぬ意義がある。カザフスタン共和国と日本との、民間を含む友好関係のいっそうの強化に資する点のことに他ならない。日本人のカラガ

ンダ州を含むカザフスタン在留を客観的・全面的に検討するためには、この問題が日本人にとってどういう意味を持ち、どれほど敏感であるかをカザフ側が理解し、わが国諸民族に形成された若干のステレオタイプと神話を克服することが求められるのである。

旧ソ連における捕虜の歴史は、今日のロシア史学で活発に検討されたテーマの一つである。それは何よりも、1980年代から1990年代にかけて始まった公文書—外国人捕虜にかかわる公文書も含む—の機密解除によるところが大きい。

この20年、かなり多数の学術論文、モノグラフィー、資料集が公刊された。今日存在する捕虜問題に関する学術研究文献の史学史的な詳細な分析はここでの課題ではないが、その一般的な性格付けだけは示すことができる。

今日までに蓄積された研究書、出版物の大群は、次のように分類できる。1) 総論的著作、2) 個別民族にかかわる著作、3) 地域レベルの著作、4) 給養、医療サービス、労働利用、捕虜の死亡率と送還といった諸問題の多角的側面にかかわる著作、である。

上記の研究書、出版物は性格、内容、狙い、資料的基礎のいずれにおいても一様ではない。学術的会合における小さな報告、発表は、歴史学の学術誌に発表される論文、博士論文、モノグラフィーに取って代われつつある。後者はいわば等身大の研究で、過去には機密指定されていた公文書に基づいて問題の主要側面の総合的検討がなされた。扱われた諸側面の広がりには様々な領域に及んでいる。法律的・政治的・外交的領域から、人数、給養条件、労働利用の性格と傾向、医療・食糧保障、死亡率、送還に至るまで。研究書と出版物は、コンセプト面でも多様である。問題を全体主義、ソ連の弾圧政策の文脈で捉えるものもあれば、よりバランスのとれた構造的なアプローチもある。そこでは、第2次世界大戦のどの側面も不十分にしか研究されておらず、見解が極端に分かれ、長期的な展望に立てば極めて重要なことが考慮されている。

第2次世界大戦期の捕虜問題の学術的究明に重要な役割を果たすのが、資料集の刊行である。これには2000年刊行のものと同2005年刊行のものがある。第一の資料集は、ロシア連邦国立公文書館と歴史文書コレクション保存センターの機密解除された文書群に基づいて、国の指導部の捕虜政策、つまり、給養及び労働利用の条件、戦犯の摘発及び処罰、祖国への送還実施を再生したものである。この資料集には、規範的性格の文書と並んで、スターリン、モロトフ、ベリヤ、フルシチョフ等に宛てた報告メモ、現況報告、その他の情報分析資料も含まれている。これらは、捕虜に関する決定の政治的・経済的動機を完璧に解明することを可能にし、捕虜の給養、労働、生活の諸側面に関する信頼できるデータを新たに提供してくれる。

第二の資料集には、1941 - 1951年における内務人民委員部／内務省捕虜・抑留者業務管理総局傘下の地域組織の活動の結果に関するロシア国立軍事公文書館の文書、資料が含まれている。資料集には、旧ソ連13経済地域（カザフスタンを含む）に分けられた共和国・地方・州の捕虜・抑留者管理局による小報告、観察、報告メモ、情報、収容所小史が含まれている。資料集で公開された文書は、地域組織職員が捕虜給養、医療・衛生サービス、労働利用を指導する活動、また捕虜の間での政治活動の実施、祖国への送還でなされた活動を特徴づけている。

膨大な事実資料、統計資料を用いる学術研究著作〔『カラガンダ州における日本人捕虜』〕の構成、その総括・判断の程度、結論、そして付録から、地域史の知られざる側面の一つを再生するわれわれの活動がカラガンダ州の学問と文化の画期的現象となっていると言うことができる。われわれの歴史における最も無意味かつ無慈悲な悲劇の破壊的万力のもとに一たとえ一部でも一あった者の運命に対して、寛容な態度をとることの重要性をあらためて指摘したい。